

超人的ユートピアへの抵抗 『鋼の錬金術師』とナチズム

大田俊寛

アニメやコミックの物語構造

私は宗教学という学問を専攻する者であり、日本のアニメやコミックに関しては単なる一ファンというにすぎず、それらの作品群に網羅的に目を通してはいるわけではない。しかし、ただのファンとして私が常々感じていたのは、アニメやコミックの代表的作品、特に「カルト」的な人気を誇るいくつかの作品の物語において、ある同一の主題が執拗に反復されているのではないかと、ということである。その物語の構造を簡潔に定式化すると、次のようになる。

(1) 社会にうまく馴染むことができず、疎外感を抱えた主人公が登場する。そして主人公は、その疎外感を解消するために、

何らかの「能力」を求める。

(2) その過程で主人公は、同じ「能力」の獲得を目指している組織的勢力に出会う。その勢力は、「能力」を完全にわがものとすることによって、世界の支配を目論んでいる。

(3) 主人公は次第に、そうした組織が求めるユートピア的世界観に違和感を抱くようになる。そして主人公は、組織と同種の「能力」を使うことによって、彼らに対抗する。

いくつか具体例を挙げておこう。物語にこうした構造が現れている典型的な作品は、『機動戦士ガンダム』である。主人公のアムロは、機械いじりを好む内気な青年であり、両親と離れ、宇宙空間に浮かぶコロニーで生活している。彼はある切っ掛けから地球連邦軍とジオン軍との戦争に巻き込まれ、父親が開発したガン

ダムというモビルスーツに乗り込んで戦うことになるが、その過程で「ニュータイプ」と呼ばれる能力に目覚めてゆく。そして、その能力を利用して人類全体の意識の覚醒を目指しているのが、ジオン軍に属するシャアという人物である。ガンダムの物語は、「ニュータイプ」の能力を政治的革命に利用しようとするシャアと、それに対する共感と反発を示すアムロとの確執を軸に展開される。

先述した物語の構造は、庵野秀明によって監督された二つの作品、『ふしぎの海のナディア』と『新世紀エヴァンゲリオン』においても顕著に見られる。『ナディア』の物語における主人公のジャンは、両親がおらず、叔父夫婦に育てられた少年である。彼もまた、アムロと同じように機械オタクであり、科学の力によって人間を幸福にできると信じている。そしてジャンはあるとき、「超科学」の力を有する二つの勢力、すなわち、ネモ船長率いるノーチラス号と、ガーゴイル率いるネオアトランティスに出会い、両者の抗争に巻き込まれる。『ナディア』の物語によれば、人間に知恵を与えて文化的生物へと造り上げたのは、宇宙から地球に到来したアトランティス人である。ガーゴイルは、「超科学」の力を持つ優れたアトランティス人こそが地球を支配するべきであると主張し、これに対してネモ船長やジャンは、ノーチラス号の力によってその野望に抵抗する。

『エヴァンゲリオン』の主人公は、碓シンジという名の内向的

な少年である。彼は両親から教育を放棄され、「先生」の許で生活していたが、父親から突然呼び出しを受け、エヴァンゲリオンというロボットに乗るように命じられる。エヴァンゲリオンを動かすためには「シンクロ（率）」という特別な能力が必要であり、シンジはその点で卓越した力を示す。しかしその背後では、ゼーレと呼ばれる秘密結社が糸を引き、現在の不完全な人間を神的存在へと人工進化させようとする、人類補完計画というプログラムを進めている。ゼーレは、エヴァンゲリオンと深く「シンクロ」できるシンジの能力を、人類補完計画を実現するために利用しようとするが、最終的にシンジはそれを拒絶し、一人の人間として生きることを決意する。

これら三つの作品においては、先に指摘した物語の構造が反復されているのが見て取れるだろう。その他には、紙幅の余裕がないため内容には触れないが、『AKIRA』や『涼宮ハルヒの憂鬱』といった作品でも、同種の主題が反復・変奏されているのを見ることができるといえる。

ナチズムの神人思想

このように、日本の代表的なアニメやコミックの物語においては、人間がそれまで持っていた欠陥を克服して「超人」や「神人」といった存在へと進化し、それによって「ユートピア」的な理想世界を実現しようとするモチーフ、さらには、そのような野望に

抵抗しようとするモチーフが見られる。そして後に述べるように、荒川弘の『鋼の錬金術師』（以下、ハガレンと略す）もまた、このような物語構造が見られる典型的な作品の一つなのである。

それでは、アニメやコミックに見られる「超人的ユートピア」のモチーフは、どのような理由によって生まれてきたのだろうか。それは日本のサブカル的想像力において生じた、非現実的な夢想の一つに過ぎないのだろうか。否、単純にそうは思われない。私の考えではそれは、これまでの歴史が人類に突きつけた最大の問題と言っても過言ではない、ナチズムの問題とつながっている。すなわち「超人的ユートピア」を目指す運動は、近代の歴史に実際に出現し、世界に深刻な惨禍をもたらしたのである。

ヒトラーによるカリスマ的支配、ユダヤ民族の大量虐殺、障害者を駆逐して心身共に健全な人間を育成しようとする優生学……ナチズムが実行した数々の事柄は広く知られているが、それに比べて、その運動が根底において有していた思想や世界観については、一般にそれほど認知されていないように思われる。その内実についてここで詳しく述べることはできないので、一冊だけ参考図書を挙げておこう。それは、横山茂雄によって執筆された『聖別された肉体 オカルト人種論とナチズム』（書肆風の薔薇）である。この書物では、ナチズムの運動が、北方優良種族という「完全な人間」を人工的に創造し、それによってユートピアを地上に実現するという、オカルト的な夢想に貫かれていたことが指摘さ

れている。同書の帯には「第三帝国におけるホムンクルスの流産」と記され、親衛隊（SS）の長官であったハインリヒ・ヒムラーが、占星術や神秘主義、そして錬金術に耽溺するオカルティストであったこと、また、『二〇世紀の神話』という書物を著したナチスのイデオログであったアルフレート・ローゼンベルクについて、その歴史観の背景に神智学的な人種論や神人思想が存在していたこと、また彼が、ゲルマン民族を神聖なる古代アトランテイス人の末裔であったと考えていたことなどが指摘されている。ヒムラーやローゼンベルクほどには自覚的なオカルティストではなかったが、こうした世界観は、ナチスの「総統」であったアドルフ・ヒトラーも共有していた。有名な自伝『わが闘争』に記されているように、ヒトラーは若い頃に両親を失い、家族や地域の絆から切り離された一人の根無し草として、大都市ウィーンでの生活を送る。彼は画家になることを目指していたが、美術アカデミーへの受験に失敗し、人生の目標を喪失したままウィーンの喧噪に塗^{まみ}れていた。その頃にヒトラーは、新テンブル騎士団やリスト協会、トゥーレ協会といったオカルト結社のパンフレットを読み、アーリア民族至上主義と反ユダヤ主義の世界観を受容することになる。そして彼は、『わが闘争』の記述にも随所に現れているように、アーリア民族こそが「高度の人間性の創始者」であり、人間の文化に見られる優れたものはすべてアーリア民族によって生み出されたこと、その反面、ユダヤ人は劣等民族であり、

寄生虫やペストのように人間の体内に潜り込んで、その血を汚そうとしていることを主張し始めるのである。

ヒトラーの掲げるアーリア民族至上主義は、単なる近代的ナシヨナリズムの高揚という次元を超えて、人が神的存在へと進化するという幻想的な次元にまで到達していた。彼は、ナチの幹部の一人であったラウシュニングとの個人的な対話のなかで、自らの考えを次のように表現している。

「天地創造は終わっていない。少なくとも、人間という生物に関するかぎり終わっていない。人間は、生物学的に見るならば、明らかに岐路に立っている。新しい種類の人類はいまその輪郭を示し始めている。完全に自然科学的な意味における突然変異によってである。これまでの古い人類は、これによって、必然的に、生物学的に衰退の段階に入っている。古い人間は、衰退形態においてのみ、その生を生きながらえるのである。創造力は、すべて新しい種類の人間に集中することになる。この二種類の人間は、急速に、相互に逆の方向へ発展している。一方は、人間の限界の下へ没落していき、他方は、今日の人間のはるか上まで上昇する。両者を神人および獣の大衆と呼ぶことにしたい。」

「それは、ニーチェと、彼の言う超人を想起させます。しかし、これまでは、それを精神的な意味に翻訳してとらえていま

した。」そう私は答えた。

「そうだ。人間は超克されねばならぬものである。むろんニーチェはこれについて、すでに彼なりに知っていたのである。彼は超人を、すでに、生物学上の新種とさえみなしていたのである。むろんこの考えは、ニーチェにおいてはぐらついていたのであるが。人間が神となる。これこそごく明快な意味なのだ。人間とは生成途上の神である。人間は、自己の限界を乗り越えるべく、永遠に努力しなければならない。立ちどまり閉じこめれば、衰退して、人間の限界下に落ちてしまう。半獣となる。神々と獣たち。世界の前途は今日、そのようなものとしてわれわれの行く手にあるのだ。こう考えれば、すべては、なんと根源的で単純になることかご」

（『永遠なるヒトラー二九六―二九七頁、八幡書店、傍点は引用者』）

ヒトラーは、近代的な群集のあり方を激しく嫌悪していた——かつては自身もその一人であり、また彼は、群集からの熱狂的支持によって「総統」の地位を獲得したにもかかわらず。彼は群集を、不完全な人間、墮落への道をたどりつつある「獣的」存在と見なし、その否定的特性を、すべてユダヤ人へと投影する。そして、それと対照的にヒトラーの目に際立って映るようになるのは、アーリアンゲルマン民族の本来的な優秀性である。その民族は、金髪・碧眼・長身という美しい身体、優れた知性、高貴な道徳心

を有する。それは、完全な人間のあり方を体現した存在、否、それ以上に、人間を超えた存在、神を目指した生成の途上にある存在なのである。強制収容所におけるユダヤ人の虐殺、優生学に基づく人体実験、「生命の泉」^{レイベンスボルン}という施設による優良人種の育成など、ナチズムの活動は、ゲルマン民族の血を浄化することによって、完全な人間、神人とも言い得る「超人」を生み出すことに向けられていた。そしてその最終的な目標は、超人たちによる共同体、すなわち、「第三帝国」や「生存圏」と呼ばれる地上のユートピアを建設することにあつたのである。

『鋼の錬金術師』とナチズム

作者である荒川弘がそのことにどれだけ自覚的であつたかは分からないが、ハガレンの物語には、ナチズムに由来するさまざまなモチーフかふんだんに散りばめられている。少し余談をすれば、そのことを感じ取つたのは、もちろん私だけというわけではないだろう。二〇〇五年に公開された映画『鋼の錬金術師 シャンバラを征く者』は、原作とはかなり異なつたストーリーが展開されているが、そこでは現実世界に飛ばされたエドが、錬金術や魔術の力を有するユートピア^{ウーレ協会}Ⅱ^{ウーレ協会}シャンバラを目指すナチスの勢力（トウレ協会）に対して、その野望を阻むために奮闘するという内容が描かれている。この映画の製作に携わつた人々も、ハガレンとナチズムのあいだの密接な親近性に気づいたと思われる。

全体として言えば、ハガレンの物語は、神への進化を目指すホムンクルスの勢力と、それを阻止しようとするエルリック兄弟、彼らの父親であるホーエンハイムらとの相克を描いている。ホムンクルスたちは、アメリトリス国をその背後で牛耳り、神への進化の計画を密かに進めるのであるが、その経緯が、ナチズムの運動と酷似しているのである。両者の共通性は、特に次の四点に見出されるだろう。

(1) 神人思想

すでに指摘してきたように、両者のもっとも大きな共通性は、人間が神的存在へと進化しようということ、より具体的に言えば、特別な知識（「優生学」や「錬金術」）を用いて人間の生命を純化することによって、人工的に「神」を造り出すことができると考える点にある。両者の運動はともに、神への人工進化を究極的な目的としているのである。

(2) 民族粛清

ナチズムにおいては、ユダヤ人が「劣等民族」と見なされ、アリア民族の純血が汚されるのを防ぐために、ユダヤ人を絶滅させるための施策が採られた。ハガレンにおいてユダヤ人粛清を思わせるのは、「イシユヴァール殲滅戦」のエピソードである。ここでは「大総統令三〇六六号」に基づき、アメリトリス国の軍人も含め、すべてのイシユヴァール人の粛清が厳命される。最終的にホムンクルスたちは、感情や肉体に縛られた人間そのものを不

完全な生命体と見なし、アメストリスの全国民を賢者の石に変え、自身が神へと進化するために利用しようとする。

(3) 人体実験

「死の天使」と呼ばれたヨーゼフ・メンゲレに代表されるように、ナチスは強制収容所の附属医院において、ユダヤ人や障害者を用いた人体実験を繰り返し行った。それは、人間の欠陥や劣等性の原因を探り当てることによつて、より優れた人間を生み出すために必要と考えられたのである。同様にハガレンにおいては、タイム・マルコーやノックスといった軍医たちが、イシュヴァール人を使った人体実験を行い、さらにはその魂から賢者の石を錬成するというエピソードが描かれている。

(4) 総統独裁

周知のようにナチスにおいては、ヒトラーが「総統^{フューラー}」と称され、彼による独裁が行われた。ハガレンの物語の舞台であるアメストリス国は、軍部が政治を掌握する軍政権が敷かれており、その頂点には「大総統」キング・ブラッドレイが君臨している。ヒトラーの能力がその卓越した弁舌の才にあつたのに対して、ブラッドレイの能力は強靱な戦闘力にあるが、通常の間人を超えた特別な能力にそのカリスマ性の源泉があるという点で、両者は共通している。また、特徴的な口髭などの外見においても、ブラッドレイはヒトラーを戯画化していることが伺える。

二人の父——「お父様」と「クソ親父」

ホムンクルスたちは、人間によつて生み出された「人造人間」としての地位を超え、神になることを目指すが、もちろんそのこと自体が、ハガレンの物語の主題であるわけではない。多くの人間の魂を内部に取り込み、神という全知全能の生命体に人工進化するという構想は、一見したところ理想的でありながらも、ナチズムの運動もそうであつたように、人間性に対する耐え難い暴虐を孕むことになる。ゆえにハガレンにおいては、主人公のエルリック兄弟が、どのようにしてホムンクルスの企みを察知するのか、そしてそれにどのように抵抗するのかということに主題が置かれるのである。

ここで簡単に、ハガレンの物語を要約してみよう。エルリック兄弟の父親は、かつてクセルクス国で暮らしており、一人の奴隷として、ある錬金術師に所有されていた。その錬金術師は彼から大量の血液を採取し、フラスコのなかに人工的な小人「ホムンクルス」を造り出す。ホムンクルスは、名前のなかつた彼に「ホーエンハイム」という名を与え、一人の間人として自由と権利を手にしたくはないかと唆^{そそのか}し、錬金術の知識を教える。そのときクセルクススの王は病に伏しており、不老不死の能力を渴望していた。王はホムンクルスにその方法を尋ね、国民の大半を抹殺してその魂から永遠の生命を錬成する方法を教えられる。王はその言葉通

りに国民を抹殺するが、ホムンクルスはそれを利用して生身の身体を手に入れ、ホーエンハイムは、クセルクセス王に代わって不死の身体を、そして人間としての自由を手にしたのである。

他人の所有物であるために、「モノ」としてしか扱われない一人の奴隷と、肉体を持たないために、フラスコから出られない「精神」的存在としてのホムンクルス——。二人は、互いに欠けている点を補い合い、それによって自由を手にしようとする。あ

(省略)

大總統キング・ブラッドレイ
『鋼の錬金術師』第18巻、111ページ
スクウェア・エニックス

る意味でホムンクルスとは、「自由になりたい」というホーエンハイムの無意識的欲望から生まれたものと見ることもできるかもしれない。ホムンクルスがクセルクセス王を欺くことによって、ホーエンハイムは奴隷の身分から解放され、またホムンクルスは、肉体を得てフラスコの外に出ることができたのだが、自由を求めるホムンクルスの欲望は、そこで止まることがない。彼は自分の内面から人間の劣等的感情である「七つの罪」を切り離し、人間以上の存在へ進化することを目指す。そして「七つの罪」からは、新たなホムンクルスたちが生み出される。彼らは最初のホムンクルスを「お父様」と呼び、彼が全知全能の存在となり、神としての絶対的自由を手にするために裨益するのである。

その一方でホーエンハイムは、不死の肉体を抱えたまま各地を放浪し、人間であるにもかかわらず死ぬことができないという状態に、深く苦悩する。彼はアメストリス国のある地方でトリシャという女性を愛し、エドワードとアルフォンスという二人の子供を得るが、家族のなかで自分だけが老いることがないという状況に耐えることができなくなり、彼らの元を去る。その後、母親のトリシャも間もなく病没したため、エルリック兄弟は幼くして孤児になってしまう。そして彼らは、母親を取り戻すために、父親が残していった書物から錬金術を学び、「人体錬成」を試みる。

アニメやコミックの物語においては、社会の絆、特に家族の絆から切り離された人物が主人公として登場し、その疎外感を解消

するために「母なるもの」の回復を求めるといふモチーフがしばしば描かれる。そしてハガレンの物語も、その例に漏れない。精神分析の概念を援用すれば、ハガレンにおいて錬金術とは、幼児的な全能感を再び獲得したいという欲望を象徴しており、エドとアルは錬金術を用いて、いつも母親がそばにいてくれる生活という、ささやかな「ユートピア」を取り戻そうとする。しかし、人体錬成は錬金術における重大な禁忌であり、「等価交換の原則」と呼ばれる法的次元の存在が、彼らの願望を阻む。彼らが生み出したものは、魂を持たないおぞましき肉塊にすぎなかった。またその行為の代償として、エドは片手片足を、アルは身体すべてを失ってしまう。

エドとアルは人体錬成の禁忌を犯すことによって身体を失うが、そのとき「真理の扉」の向こう側にあるもの、すなわち、錬金術の力の源泉を垣間見る。精神分析の知見を再び援用すれば、それは、神的な全能状態が実は自閉的な無能状態と等価であること、あるいは、絶対的に充溢した永遠の生が死と等価であるということとであったと思われる。身体という「通行料」を支払った代価として「真理」に触れたエドとアルは、錬成陣なしに錬金術を使うことができるという特別な能力を会得する。エドはその能力によって、アメストリス国公認の国家錬金術師となり、「軍の狗」として国家に奉仕しながら、身体を取り戻す方法を模索する。そしてその過程で彼らは、アメストリス国の軍事政権が、その背後で

ホムンクルスたちによって操られていること、そしてホムンクルスたちが国土全体を一つの錬成陣に変え、国民の魂を吸収して神へと進化しようとしていることを察知するのである。

最終的にハガレンの物語は、全知全能の絶対的自由を手にしようとするホムンクルスと、クセルクス国で起こった悲劇を再び繰り返してはならないと考えるホーエンハイムの対決へと収斂してゆく。ホーエンハイムは、自身の体内に吸収されたクセルクス人たちの魂との対話を続け、自分たちの生命を犠牲にして、ホムンクルスの野望を阻むことを決意する。

両者の対立は、二人の父、すなわち、全能の原父たんとする「お父様」||ホムンクルスと、一人の人間としての限界を受け入れようとする「クソ親父」||ホーエンハイムの対立を意味している。そして、主人公のエドとアルはこの対立に介入し、かつて自分たちを捨てた父親との和解を遂げ、最後には自身の力でホムンクルスを打倒することになる。この点でハガレンの物語は、古今東西の諸神話に見られる「原父殺害」のモチーフを反復していると思われることができる。それではエドはどのような仕方、神と化したホムンクルスに打ち勝つのだろうか。

アニメやコミックにおける多くの平凡な作品であれば、主人公が敵対者以上の全能の力を獲得することによって勝利する、という展開が描かれるのだが、ハガレンの物語が卓越していると思われるのは、むしろ主人公が、全能性への欲求を断念することによ

って敵に打ち勝つとされている点である。ホムンクルスはいったんは神の力を獲得したものの、その力を自らの内に押さえ込むことができずに自壊し始め、錬金術の力ではなく、エドが放つ素手の一撃によってとどめを刺される。ホムンクルスは「真理の扉」の前に引き戻されるが、それでも全能欲求を断念することができず、真理という自閉的空間のなかに幽閉されてしまう。それに対してエドは、再び「真理の扉」の前に立ち、錬金術の力によって自分の願望を叶えようとしたこと自体が過ちの始まりであったこと、自分が最初から「ただの人間」に過ぎなかったことを受け入れ、錬金術の能力を放棄することと引き換えに、アルの肉体を取り戻す。こうしてエドとアルの兄弟は、ただの人間としての日常——しかし、何より価値のある日常——を取り戻すことができたのである。

ハガレンという作品に触れ、私が感じたのは、一つの原理のなかに身も心も溶かし合う強固で緊密な共同体を形成したいという幻想、さらに、生命を人工的に操作することによってそれを実現したいという幻想が、今もまだリアルなものであり続けているということであった。本論で述べてきたようにこの幻想は、ナチズ

ムの運動において現実的に遂行されたという経緯があり、それは連合国軍の勝利によって武力的に打倒されたわけだが、その幻想の根が完全に断たれたのかと考えれば、決してそうではない。むしろ、一方で社会が人々にもたらす疎外感がいつそう深まり、他方で生命科学の技術が具体的に進歩することによって、その幻想が現実世界へと滲み出てくる可能性は、さらに高まりつつあると見ることもさえてできるだろう。

戦後において、日本のアニメやコミックの物語が繰り返し主題化してきたのは、こうした現代的な全能欲求の幻想を昇華し、一人の人間として生きるための方途を指し示すことであったと、とりあえずは要約することができる。しかし、言うは易く行うは難しの言葉通り、このような主題をうまく物語のなかに定着させ、納得のゆく結論を描き出すことは、実際にはきわめて難しい（近年では、『エヴァンゲリオン』の物語がたどっている迷走が、そのことを如実に示しているだろう）。ハガレンという作品は、本論の最初に示した主題を反復しつつ、全能欲求の昇華や父と子の和解、世代間の継承の問題などを、洗練された物語形式のなかに描ききったという点で、高く評価することができるのではないだろうか。

（おおた としひろ・宗教学）